



祐介の目

No.126

大田祐介 (福山市議会議員)

戦艦大和秘話

建国記念の日、ノンフィクション作家・門田隆将氏の講演会で大和と福山市出身者の数奇なご縁を拝聴した。駅家町大橋出身の三上作夫中佐は連合艦隊作戦参謀であり、大和と三千人の乗員の運命を左右したキーマンだった。

マッカーサーが上陸したレイテ島に連合艦隊の総力を挙げて殴り込みをかけたレイテ沖海戦、これは大和の46cm主砲が敵艦隊に向けて火蓋を切った唯一の戦いであり、世界史上最大の艦隊決戦だった。大和がレイテ突入に逡巡した際に「天祐を確信し全軍突撃せよ」という有名な命令を打電したのも三上参謀という。大和は突入目前で反転したが、謎の反転として戦史研究者の間で語り継がれている。もしレイテに突入していれば大和はマッカーサーと共に討ち死にし、日本の戦後史が大きく変わっていた可能性がある。三上氏は「我が海軍が真に全

力を挙げて戦った事実上の最終戦であった」と回想している。

昭和20年4月、敗戦色濃厚となり三上参謀は沖繩の米機動部隊を佐世保近海におびき出して大和を含む残存兵力で撃滅する作戦を立案するも首脳部に一蹴される。代わりに沖繩に向けての水上特攻作戦を大和に伝える役目となり水上機に乗って大和に向かうが、舷側に着水する三上機を同じく福山出身の八杉康夫氏が目撃していたそうだ。大和の伊藤長官に作戦を説明するも、作戦の最終目的を問われて答えに窮する。「要するに一億総特攻のさきがけになって頂きたい」と伝えると伊藤長官は「それならわかった」と即座に納得したという。

門田氏は大和の生き残り十数人に取材を行ったが、全員口を揃えたかのように「沖繩の人を救えず申し訳ない」と言われたそうだ。無謀な作戦とはいえ命令を遂行できなかったという大正生まれの男達の責任感の重さに感銘を受けた。「私」より「公」を重んじ、戦後復興や高度経済成長を実現した世代と言える。三上氏は戦後海上自衛隊の自衛艦隊司令官等を歴任して平成8年に89歳で逝去された。